



みんな知らない卵子のこと



先日、某所でのカウンセリングのこと。

気が付けば40歳。対人関係を深めるのは苦手で、彼氏との関係は進展しないけど結婚願望は強くある。高齢出産が不安だけど子どもは欲しい。「結婚して子ども作っちゃえばなんとかなりますかね…」

不妊カウンセリングではなかったのですが、結婚への依存や子どもへのこだわり、世間の物差しを気にして、自分自身を直視したくなくて目をそらしてしまう。様々な訴えに耳を傾ける日々です。

こんな時、生殖心理カウンセラーでもある私は、情報提供として妊娠についてや卵子についてお話することがあります。すると、ほとんどの方が「そんなこと聞いたことがない」「大丈夫、産めますよと言って欲しかった」等と言われます。

女性が自分の身体のこと知らない、子どもを授かりたいと希望されるのなら、少しでも卵子や卵巣機能のことを理解していただきたいと思い、今回は卵子と妊娠適齢期について書きます。

平均寿命が延び、年齢に比べて若くてきれいな女性が多くなりましたが、閉経年齢は延びていません。生理があるうちは妊娠できると思っていらっしゃる方が多くいますが、これは間違いです。普通、51～52歳位で閉経しますから、妊娠適齢期の限界は閉経の10年位前までです。妊娠できる卵がなくなってもホルモンが出ているので生理はあるのです。



卵子は5～6カ月の胎児の頃には500～700万個あると言われています。ところが、生まれた時にはすでに200万個、思春期には10～30万個ほどに減ってしまい、以降1カ月で1000個位減るとされています。排卵は一番成熟した大きな卵胞の中の卵子が1個卵胞を突き破って卵巣の外に飛び出します。

こうして排卵される卵子は月に1個、一生涯でもせいぜい400～500個と言われています。卵子は減っていくばかりではなく、時間が過ぎるとどんどん古くなっていきます。卵巣は卵子を保存しておくところで、質の良い卵子がたくさん残っているほど妊娠はしやすく、残りの数が少なくなるほど妊娠しにくくなります。35歳頃から妊娠率が落ちてきて、流産率が上昇するというのは、質の良い卵子が減って自然淘汰が働いているということなのです。

医学が進歩して不妊治療も進み、体外受精や顕微授精ができるようになって、卵子の寿命を変えることはできないのです。

ニュースで50代、60代で出産したというのは、自分の卵子ではなく、提供卵子（人の卵子をもらって）ということなのです。

みなさんはこのこと知ってましたか??

参考文献 著者 浅田義正 「赤ちゃんは、待ってこない！」現代書林



8月・9月のカウンセリング予定日

8月7日、14日、21日、28日 8月は不妊学級はありません。

9月11日（不妊学級）、18日

9月4日は学会のためカウンセリングお休みさせていただきます。

(9月19日～26日は培養室改装のため休診となります)